【22】

| | |
|---|---|
| 氏　名（国籍） | **松江（まつえ）　レジーナ　良恵（よしえ）（ブラジル）** |
| 学位の種類 | 博　　士（国際政治経済学） |
| 学位記番号 | 博　甲　第　4162　号 |
| 学位授与年月日 | 平成 18 年 9 月 30 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 |
| 審査研究科 | 人文社会科学研究科 |
| 学位論文題目 | **Religious Activities among the Brazilian Diaspora in Japan：The Cases of the Catholic Church，*Sekai Kyuseikyo* and *Soka Gakkai***<br>（在日ブラジル人と宗教活動－カトリック，世界救世教，創価学会の事例研究） |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 主　査 | 筑波大学教授 | 博士（文学） | 前　川　啓　治 |
| 副　査 | 筑波大学助教授 | 博士（文学） | 関　根　久　雄 |
| 副　査 | 筑波大学教授 | 博士（文学） | 小野澤　正　喜 |
| 副　査 | 淑徳大学教授 | Ph. D.（人類学） | 松　岡　秀　明 |

## 論　文　の　内　容　の　要　旨

本論文は，現在ディアスポラ（故郷喪失者）と呼ばれる在日ブラジル人の宗教的実践について，具体的にカトリック，世界救世教，創価学会の事例を取り上げて，検証したものである。

1980 年代のブラジルの深刻な不況と日本における未熟練労働者の不足に伴い，日系ブラジル人の日本移住が増加してきた。日系二世，三世はブラジルを祖国として認織すると同時に，祖先の地日本とのつながりをも意識している。しかし，遠くから想像していた日本に「戻る」と，社会的に疎外感を抱いたり，周辺化されたり，また自身を外国人として周辺化したりしているのが現状である。こうした人々は「二重に疎外されてきたマイノリティ」であり，二つの故郷に引き裂かれた「二重のディアスポラ」といえよう。

日系ブラジル人が，規模の上では日本で三番目の外国人集団であること，また従来，彼らに関する宗教的現象があまり研究されてこなかったことが，本論で彼らの宗教的活動を取り上げる主な理由である。

第一章では，ブラジルにおける日系人ディアスポラを構成する政治社会的脈絡や出来事を取り上げている。具体的には日系人のエスニック空間の形成，第二次世界大戦中のブラジル政府による日系人の同化の仕方，日系ブラジル人の民族アイデンディティの回復に果たした宗教の役割の重要性を明らかにしている。そして，ディアスポラのアイデンティティが固定したものではなく，社会的・歴史的環境を通じて恒常的に変化を遂げてきたことを確証している。失われた状態のなか社会的現実の再構築に苦労し，交渉している移民にとって，宗教組織への所属がその重要な手段ともなっていることを示唆している。

第二章では，日系ブラジル人移民の事例研究として埼玉のカトリックの教区に焦点をあてている。まず，この教区での活動について述べ，ブラジル人の存在への対応の仕方，教会が移民集団の支援とネットワークの源泉となっている点，また教会が多くの移民の社会的活動のセンターであり，同胞と社交する場となっている点を叙述している。さらに，移民と地域の日本人との関連に関する問題を取り上げ，ブラジルの民衆的祝祭が両者の行き来を促進している点を明らかにしている。そして，生活と宗教についての移民の語りを通して，いかに彼／彼女たちがカトリック教会への所属を通し他者と交渉し，宗教的意味とアイデンティティを再創造しているかを解明している。カトリック教徒であることはブラジル人であることと同義であり，子

供の教会への信仰行為を通して，ブラジル人としてのアイデンティティを再生産している。カトリックの価値への志向性は単なる社会的傾向というものではなく，移民という脈絡のなかで，自らがその社会的意味を構築し，自らのアイデンティティを再生産する行動であると結んでいる。

日系人はまた，日本の宗教，とくに新興宗教と以前から関わってきた。第三章では，まずそうした宗教の概観を示し，ブラジルでの布教活動を分析している。1960年代以降，新興宗教は海外への布教活動を始めたが，ブラジルはとくにその対象として好まれた。そして，伝統的なカトリック信仰に不満を抱いていたブラジル人にとって，それは代替的な宗教慣行を提供することになった。とくに日本の伝統に基づく自己修練という考え方は，すべての人に天賦の神性があり，そうした超越的なものに至るには特定の宗教集団の考え方や処方，祈祷に従い，自らの運命の行為者となる必要性がある点を強調した。人は意志によって自身を統制し，運命をつかさどるエージェントであるという考え方は，ブラジル人には適合的ではなかったが，人々を惹きつける原動力となった。

日系人の日本への出稼ぎ移民がこうした新興宗教集団に影響を与えているが，現在，新興宗教集団は日本のブラジル人コミュニティに布教活動を行い，言語・文化の相違による社会的疎外に起因する問題への対処の手段を提供している。

第四章と第五章では，それぞれ世界救世教と創価学会を対象に，その特質をあげ，ブラジルにおける適応の過程を描いている。その違いは，世界救世教がシンクレティック（融合的）な傾向があり，カトリックとの同時信仰と協働を認めているのに対し，創価学会はシンクレティズムを認めず排他的な傾向にある点である。また，各々の章の第二節では，信者の語りを示し，各宗教への信仰の動機と，各アクター（行為者）が自らの問題をいかに各宗教の信仰論によって解釈しているかに光をあてている。

また，世界救世教は日系人への布教として祖先崇拝の重要性を強調する一方，創価学会は日本人としての出自は重視せず，グローバルな展開を目指す創価学会インターナショナルの一員であることを促している。問題への対処の手段と解釈は異なるが，いずれも移民自らの人生や運命に対し，自己責任において立ち向かうことが強調されている。人は自らの運命を変革することができる能動的エージェント（主体）とされ，不確定や不安に対処するために，各組織の宗教活動や教えに身を投じることとなる。採取された個々の日系ブラジル人の語りは，個々人が組織の教えと導きを通して現実の諸問題を解釈し，自身の実践を構築するために交渉し，苦心している点を明らかにしている。

第六章では，移民がカトリック，世界救世教，創価学会とどう関わっているかを総体的に比較分析し，それを受けての結論の章では，カトリック信者はブラジルとディアスポラ集団全般の中間，生長の家の信者は，ブラジルと日本とディアスポラ集団全般の中間，創価学会の信者は，それら三者を越えたところに位置すると結論づけられている。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

人類学において移民研究は昨今の中心テーマの一つとなっている。日系人移民の研究も徐々にではあるが，厚みを増してきている。そうした日系人移民が，1980年代以降日本に再移住してきているという経緯がある。

本研究はそうした新たな移動という現象を捉え，日本社会という新たな環境において苦悩する日系人移民の適応のあり方を，宗教組織との関わりからみようとしている。実際，移民研究では，移住先の新たな環境に適応する際に，宗教組織が移民コミュニティを再構築する際の核の一つとなっているというさまざまな報告がある。しかし，これまでの日本における日系人移民の研究では，そうした視点からの調査，研究はほとんどなかったという点で，本研究はそれ自体の価値があるといえよう。

本研究では，ブラジルの国家宗教であるカトリックだけでなく，日系人に信者の多い世界救世教と創価学

会の活動をブラジルでの展開から遡及し，あらたな展開としての日本での日系人への布教をおさえ，実際に日系人各人が各々の宗教活動に対し，どのように関わっているかを明らかにしている。具体的には，埼玉，東京，熱海，箱根，京都，栃木県真岡で継続的なフィールドワークを行い，多数の信者へのインタービューによって個人史を採取している。またカトリックの場合は生活の一部となっている祝祭などの活動に参加し，日系人と地域の人々との交流過程を通し，その関係性構築の側面をも明らかにしている。個人史においては，個々人がいかに新たな環境で苦悩しながらも，カトリックの場合は主として組織の協力体制を通して従来の世界観を維持し，また日本の新興宗教の場合は，その教えを通して世界観の再構築を行っているかを詳細に叙述し，まとめあげている点に本論の意義が見出せる。

また，本研究では，そうした個人と各々三つの宗教組織との関係性を構造的に比較することにより，カトリックの国民的日常性，世界救世教の融合性，創価学会の独自の世界性という差異を明らかにしている。さらに，とくに日本の新興宗教の場合，各個人をアクターとして捉え，彼／彼女たちを，宗教を一つの手段として自らの運命を変革する能動的エージェント（主体）として捉えている点が重要であり，この分野での移民－宗教研究の今後の方向性が明瞭に示されているものといえる。

一方，本研究における主要な概念である，「二重のディアスポラ」自体は意義のある概念であるが，ブラジルにおける移民一世，二世のディアスポラ状態と現在の日本における移民二世，三世のディアスポラ状態の比較がもっと意識的になされていたら，この概念はより有効なものとなっていたといえよう。

また，宗教組織への関わりを通じて日本社会に適応できた人たちはよいが，そのように順応できなかった人たちの調査は本研究での対象とはなっていない。そのような面の研究が必要である点が指摘されており，今後の研究に期待したい。そうした研究考察の展開は，本研究にさらなる発展をもたらすものと思われる。

よって，著者は博士（国際政治経済学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。